

文章を綴る

2025.4.1

今日から4月となった。新年度のスタートである。学校を中心として、今日は、多くの出会いが生まれる日である。緊張と期待に包まれるときである。そこには、希望がある。人は、誰でも前に進みたいと思っている。今日が、その第一歩となる人が多いことだろう。

昨年度から始めた「園長通信～こころ～」も2年目となる。「校長室だより～燦燦～」からそのまま移行したような形となった。自分では意識していなかったが、文章が少しずつ変化してきているように感じる。校長時代には、役職柄か、どこか制限をかけているようなところがあった。園長になってからは、制限が全くないというわけではないが、自由度が増したような気がする。そのためか、自分でも今の文章のほうがいいように思う。

毎日読んでいただいている読者の方から、次のようなコメントをいただくことがある。

～こころ～さらに面白くなってますね。日常の何気ないことを広く捉えて深く発展させ、最後は必ず温かく結んでいますね！人生経験豊かなものだからこそなせる技ですね。とにかく、真面目な文章の中にもユーモアが溢れてホッコリとした気持ちになります。以上、読後感でした。

個人感想ですが、「まぬけ」的な話題を哲学的に考える滑稽さ、そして、自虐的なことを客観的に分析していること。それらは、読者に安心感を与えていると思います。

自分の文章をここまで分析していただけるのは幸せなことである。自分では意識していなかったこと、自覚できていなかったことが、急に眼前に姿を現す。歳を重ねたからといって、いい文章が書けるわけではないと思っていた。ところが、随筆、随想、エッセイの類は、それなりの人生経験や知見などがあつたほうがいいのかもしい。

自分の場合だが、若い頃では、今のような文章は書けなかったと思う。それが今では、慣れもあるが、書き出せば1号分が15分から20分で出来上がる。以前よりも、原稿を作成する時間は短くなっている。だからといって、中身がよくなっているかという、そうとも言えない。そこが、文章のむずかしく、悩ましいところである。

今年度も、人との出会い、ふとした出来事を切り取り、この紙面を使って文章にしていきたい。月に一度のペースで書いてきた福島民友新聞「随想」も継続する。本日が、新年度最初の掲載日である。この一年も、文章を綴る時間を大切にしながら何気ない日々を充実したものにしていきたい。